



豊田つ子

学校だより第10号
令和8年 2月
富山市立豊田小学校

ほめるための種をまく

校長 吉野 哲

子供に限らず、人はほめられるとうれしい気持ちになります。また、さらなる意欲付けの原動力になることもあります。今回は、「ほめる」ということに関して、国語教育の第一人者である大村はま先生の言葉を基に考えてみたいと思います。その言葉とは「ほめる種をまく」です。大村先生はこの言葉の意味として、次のようなことを述べています。

- ・子供に対しては、ほめることが大切である。しかし、よいことがあったからほめようということではなく、その子供にほめることが出てくるように、ほめる種をまいていくことを考えたい。
- ・よいことがあった子供、よくできた子供だけをほめていくと、まんべんなく全員をほめることにはならない。
- ・学年が上がると、ほめるに値しないことをほめられたときには、喜ぶよりも、何かいたわられているという辛い気持ちになることがある。
- ・ほめる大切さと、ほめる種をまく大切さを並べた時、ほめる種をまくことに重く心に留めたいものである。

では、具体的に「ほめる種をまく」とはどのようなことなのかを学校を例に考えてみたいと思います。

『毎日、新しく習った漢字を練習帳に練習する』という課題を子供と約束したとしましょう。いろいろなタイプの子供が出てくることが予想できます。①毎日は続かず途中でやめてしまう子供。②続いているけれども、仕方なくやっていて、たくさん書いているが字が乱雑になってしまう子供。③丁寧にたくさん練習する子供。このままだと、ほめられるのは③の子供だけになってしまいます。

そこで①の子供には「たくさんでなくていいから、毎日一文字ずつ最高に丁寧な字で書いてごらん。」とアドバイスします。たくさん書かなくてもよいとなれば、以前より続く可能性が高まります。少しでも續けば、続いたことをほめることができます。最高の一文字を目指して、何度も書き直した跡が見られれば、その気持ちをほめることもできます。②の子供には、「新しい漢字を覚えることができればいいんだよ。」とアドバイスします。漢字練習の目的を転換することで、自分なりの練習量を考えるかもしれません。漢字テストで身に付いていることが確認できれば、ほめることができます。自分のための勉強をしているその姿勢をほめることができます。

「ほめる種をまく」には、子供に応じた言葉かけや対応が大切です。言い換えれば、子供をほめることができるように教師や大人が工夫するとともに、温かい気持ちとさらなる成長を願う気持ちが必要なのかもしれません。